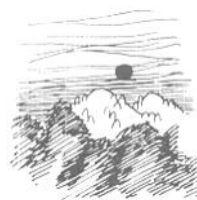


哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第145回 例会 2020年7月9日

<コロナ危機から何を学んだか?>

「久しぶりの例会でした。新たな参加者も含めて、顔を合わせてわいわいガヤガヤするのはいいですね。2回にわたる「通信」特集も参考に、コロナ危機に向き合う貴重な意見交換ができました。」

問題提起 吉田千秋(主宰)

- この間、コロナ・ウイルス感染拡大の状況下で、3月から4カ月の休会となりました。今回、場所を変えて久しぶりの例会となります。広すぎてそっけない空間ですが、3密を避ける必要があると判断しました。来月この場所を使う予定です。例会は開けませんでした。皆さんにコロナ関連の投稿を求めて、「通信」の発行は続けることができ、ありがとうございました。
- さて、政府は緊急事態宣言を解除しましたが、まだ予断を許さない状況にあると言えます。今日のニュースによれば、東京で新たに過去最高の224人の感染者が確認されています。担当の西村大臣は、感染者数の増加は検査数の増加の結果だと苦し紛れの説明をしています。感染拡大第二波の可能性は現実のものとなろうとしています。ドイツの感染症対策の責任者、ロベルト・コッホ研究所の所長は、感染拡大の波が繰り返して来る「永続波」(パーマネント・ウェーブ)の中にすでにあり、これを念頭に対策を考えると警告しています。
- いま過去に経験しなかった事態に直面しています。一人ひとり置かれている状況が違って、当然、日々の体験も様々です。その個人の体験を言葉に置き換え、他の人と共有可能な経験にする必要があります。そうすることによって、この未曾有のコロナ禍を振り返ることのできる歴史の記憶にしていければと思います。それは忘れてはならない出来事として、「記憶のエティカ(倫理)」として胸に刻みつけたいものです。私たちは、ナチスのホロコーストや日本軍の蛮行、そして原爆投下が招いた惨劇などを記憶に留める責任を負っています。

- では今回私たちは何を忘れない様にしなければならぬのでしょうか。私個人は、社会的活動の自粛が求められた期間、普段十分楽しむ時間を確保できなかった読書や散策を楽しんで過ごしました。したがってコロナ・ウイルスの感染拡大によって様々な困難に直面している当事者として問題を語る立場にはありません。だが、その人たちの体験を知って経験として共有し、考え、前に進む道を探ることができます。その出発点は、様々な状況・情報を得ること、様々な意見に耳を傾けることでしょう。
- その点で、今回「通信」特集号に寄せられた意見にはいろいろ教えられました。まず、記念シンポジウムに来ていただいた人たちなどを簡単に紹介します。物理学者の池内了さんは、コロナ関連の造語が氾濫しているが、何を忘れるべきでないかをしっかり見極める必要があると述べています。社会哲学者の中西新太郎さんは、リアルな現実を伝えない権力者が語る言葉の中味のなさについて指摘し、軽々しく「新しい生活様式」と語る前に、困った状況にある弱い立場の人たちについて考えるように訴えています。市民活動家の西郷南海子さんは、彼女の休校中の子どもたちが、“あつ森(あつまれ 動物たちの森)”という、無人島を開拓して、好きなライフスタイルを追求する暮らし作りをテーマとしたゲームにはまって、自粛生活の息苦しさに悩ま



されることなく、過ごしたエピソードを紹介しています。その趣旨は、今後の私たちの生活において、ネットとリアルな生活を対立するものとして捉えるのではなく、ネットを現実の生活に役立てることを考えることが重要だということです。

- 元岐阜市教育長の安藤征治さんは、見えないけれど存在しているものに無頓着になって、目先のものばかり追い求めることの危うさを指摘し、人間間の接触の機会が失われて、人間同士のつながりを作っていくことが課題になると述べています。弁護士の河合良房さんは、コロナ危機を口実に、政府が緊急事態を憲法に明記する必要があるとして、憲法改正に弾みを付けようとしていることに警戒すべきだとし、さらに、感染者追求アプリの様な携帯アプリを使って、監視社会が作られる危険にも注意を促しています。牧師の多田澁さんは、ナチスドイツに抵抗して殉教した神学者ボンホッフアーの言葉「一人であることのできない人は、共にいる事に注意せよ。共にいることのできない人は、一人であることに注意せよ」を引用して、コロナ体験を通して、自己中心ではなく、弱者の存在に配慮する社会を実現することの必要が明らかになったと述べています。
- 元NHKプロデューサーの津田正夫さんは、様々な情報が錯綜する中、誤魔化しや偽物に騙されないメディア・リテラシーを身に付ける必要があると訴えています。デザイナーで、県のユネスコ協会会長を務める平井花画さんは、小学校3年で英語を始めるよりも、国語をしっかり学ぶ必要を訴えています。残念ながら、授業時間の数合わせのために、コロナ禍による授業の遅れを取り戻すといって、夏休みを短縮するなど子どもたちに無理な要求をすることが懸念されると言います。そして、前岐阜県美術館長の古川秀昭さんは、コロナ禍の自粛生活で失われる大切なものは、「個人の感性」だとし、「新しい生活」の下でも、美術館へ行って絵画を楽しむなど、文化に接することが重要だと述べています。
- こうした意見も参考に、ボクなりに付け加えたいことを話します。安倍首相は感染拡大を抑えることに成功し、「日本モデル」だと自分の成果のように語っていますが、国民の眼には必ずしもそのようには映ってはいません。むしろ対応の鈍さ、不徹底さ、まずさが目立ったのではないのでしょうか。無策、遅策、愚策、失策の連続ではないかとも評されているのは当然だと思われま

す。

- ところでボクが非常に気になっている一つは、「新しい生活様式」という用語の内容です。感染防止のために当然必要だと推奨され、国民も従っています。労働のあり方、通勤の仕方、「不要不急」の外出自粛、3密注意など、感染防止に余儀なくされる事項であり、必要な事項ともいえるだろう。だが、この「新しい生活様式」は、コロナ後にも継続できるのか、継続すべきなのか、個々の内容について具体的に、詳細に検討すべきだと思われま。
- これに関して、評論家で漫画原作者の大塚英志さんのコメントに注目しました。今の「新しい生活様式」は80年前、戦時下に提唱された「新生活体制」に似ていると指摘しています。当時、政府は「大東亜共栄圏」のための戦争勝利を掲げ、国民に質素儉約を求めて、日常の生活にまで介入し「新生活体制」を強要し、国民も従ったのです。
- いま、コロナ禍の下で、自粛要請を守らない近所の隣人を警察に通報する密告が頻発しています。国民が互いに生活を監視し合う様な、残念な状況が生まれています。自粛要請はあくまでも要請であって、強制ではなかったはずで、日本人は、和を乱すことを悪しきことと考える傾向があります。要請がしばしば個人の中の心的な強制に変わってしまうようです。人々の自発的な自粛が感染拡大の抑制に有効に作用した側面は否定できないかもしれませんが、ただこうした日本人の心性は歴史的にしばしば政治家に利用されてきたことをわすれてはなりません。
- 財務大臣の麻生氏は、欧米に比べ感染拡大が著しく進行しなかったことについて、「日本人の民度が高いから」と述べました。「民度」ってなんでしょうか。「見識」だとしたら、この大臣の「民度」も高いのだろうか。まったくおかしな話です。いずれにしろ、「お上」が言うから、無批判に従うということではいけないと思います。周りに惑わされないために、まず自分で考え、ダメだと思うことにはダメだと言うことが必要だと思います。今日は、コロナ危機から何を学んだのか、いろいろ出しあって頂きたいと思います。



＜意見交流＞

問題提起のポイントを念頭に個々の意見表明をお願いします。



- *ビル・ゲイツについての疑惑の報道がある。それによると、ビル・ゲイツは地球環境を守るために人口削減を訴えていて、そのために製薬会社に多額投資しワクチンの開発を図っている。そのワクチンを接種させて、世界の人口を10%から15%減らすことをもくろんでいる。今回のコロナ・ウイルスの感染拡大も仕組まれたもので、ワクチンを作って儲けると共に、人口削減を実現しようとする陰謀であると伝えている。またワクチンにはナノチップが混入されており、これは人の動きをGPSを使って把握するための監視アプリであるらしい。本当かどうかもっと調べる必要があるが、たいへん気になる。
- *パーマネント・ウェーブ(永続波)は既に現実のものとなっている。当初、集団免疫で感染症を抑え込むことを訴えた専門家もいたが、これをめざしたスウェーデンでは明らかに失敗だった。抗体を持った者の数は限定的で、また死者の数が多過ぎる。東アジアでは欧米ほど感染がこれまで拡大しなかったが、これは政府の手柄ではない。自粛や経済低迷で起きる社会の変化が心配である。
- *この数カ月、世界全体がコロナ禍に翻弄されている。一人ひとりが自粛生活を我慢するだけで、出来ることは限られている。首を傾げたくなることも多々起きている。いわゆる「自粛警察」のために、地下鉄で暴力沙汰の事件も起きている。確かに戦中の日本と似たものがある。日本社会は何かあると一気に一つの方向に動いてしまう傾向がある。去年、ラグビーのワールドカップが日本で開催されたが、普段、注目を集めるスポーツでなかったのに、急に大注目を集めて、応援するのが国民として当然のこの様な雰囲気になった。一人ひとりの個性がないがしろにされることが懸念される。「一人であることのできない者は、共にいることに注意せよ。共にいることのできない者は、一人であることに注意せよ」は、核心をつく言葉だと思う。コロナ禍の中、世界中から個別的なものが顧みられなくなった観がある。芸術の求める美は個人の体験の表現である。ルネッサンスの巨匠ラファエロに“アテネの学堂”という作品がある。画の中心に古代ギリシャの哲学者プラトンとアリストテレスが描かれている。よく見ると、プラトンは指先を上に向け天の方を示している、反対にアリストテレスは指先を下に向け地の方を示している。哲学的立場の違いを象徴的に示したものである。人間の世界は、互いに相容れない色々な意見を持った人たちが、必要に応じて協力し合い一緒に生活するような場所ではないか。
- *大学で平和学の講義を行っている。岐阜では2月に教育委員会から休校要請があつて、小中学は間もなく一斉に従った。誰も異論を唱えなかった。政府の意向が命令の様に作用した。沖縄ひめゆり学徒隊の若い女性たちの多数は、敗戦が濃厚となって解散命令があつた後、集団自殺した。個人的には色々な思いがあつたはずだが、一人ひとりの考えは全く問題にされなかった。岐阜大学では、一部対面講義も行われているが、大半はオンラインの講義となっている。入学式はなく、新入生の健康診断だけ行われた。イタリアの哲学者ドメニコ・スキラーチェの書いた『これからの時代を生きる君たちへ』という本に感銘を受けた。改めて哲学は考える学問ですばらしいものだと思えられた。個性が尊ばれる社会でなければならない。一人ひとりが自分の頭で考えることは素晴らしい。
- *7月に転職した。病院勤務だったが、オフィスで働く様になった。病院には、コロナ禍の中、異様な緊張感があつた。仕事は現在テレワークでやっている。個人的には今後も続けた方がよいと思う。
- *世俗的な極めて現実的な問題だが、この間の世界の出来事を見ていて、医療は公共の福祉の一部と考える必要があると思った。感染症は不可抗力という判断で、コロナ・ウイルスに罹患した場合、どの国でも医療サービスは公的負担で受けられるはずである。感染症は経済活動をはじめ社会生活に及ぼす影響が

大きいので、早急に拡大を抑え込む必要があるのは明らか。しかし医療費の負担は、病気全般において個人の責任を問題にするのではなく、無料化することができるのではないか。イギリスはNHSと呼ばれる公的医療サービスを税金で賄っている。逆のモデルが米国である。米国は保険料が高いため無保険者が沢山いる。長い間医療保険を運営していたのは民間の会社だった。オバマ前大統領がようやく国民皆保険を目指して公的医療制度の実現にこぎつけた。しかし現トランプ政権は、公的健康保険との競争で、儲けの減少を嫌う保険会社の意向を受けて、公的医療を骨抜きにすることに余念がない。無保険であるか、保険があっても医療費の個人負担が大きいために、多くの人が病院に行くことを躊躇する。今回、米国でコロナの感染拡大が際立って深刻なのは、医療サービスが、誇張して言えば、金持ちの特権のようなものになっているからである。医療が利益を追求するビジネスであることの問題は明らかである。

* 在宅勤務で働いている。確かに濃厚接触の危険はない。自粛を求められ多くの人がやりたい事を控えて生活している。そのためか、人々は寛容さの欠けた見

方になりがちである。感染症に罹患する人を節度が無い人かのように白い目で見ると。病気になる人が嫌な思いをしない社会であって欲しい。

* コロナ感染症のために思いがけず亡くなった人たちがいる。命のはかなさを感じる。医療体制が破綻するのではないかと心配だった時期もある。全てが初めての体験だった。知人の娘が鬱になった。元気のいい若い人たちが大変だったと思う。野に生える草にも命がある。命の有り方について考えさせられた。人間は傲慢にならず謙虚に世界を見る必要がある。

* 新しい生活になじめない。日本人は他人の目を気にし過ぎて、ほとんど無意識に、目につかないように周りと同じ事をする。結果として個を大切にできない。挙句の果て、監視が当たり前の監視社会を生み出してしまふ。

* 普段、死はプライベートなことで、身内の死以外は関わり合うことがない。どこかで人が死に、どこかで生まれる。コロナのために、人の死が毎日、ニュースの対象になって、死が皆で共有する公的なものとなった。

意見交流の最後に 吉田千秋

・コロナ感染症問題のために、社会生活の送り方として今までと異なるシステム(やり方)が登場しました。多くの企業がテレワークを使って在宅勤務を導入しました。これなどはコロナ後もよきものとして、継続されるものかもしれません。学校では、少人数クラスが授業の形態となりました。余儀なくされたものですが、これも望ましい形態であると言えます。教師の指導には限界があって、30人、40人の学級が異常なのです。

・またコロナ危機を迎えて、いまの日本社会の問題点も浮き彫りになりました。3月頃、感染の急拡大で感染者が急増し、病院の対応が限界に達して、医療体制が崩壊しそうになりました。政府は90年代以降、新自由主義政策によって公的事業を切り詰め、財政負担を削減してきました。公立病院が統廃合されて、人員は削減され、儲けにならない分野は廃止縮小されました。今回、集中治療室のベッドが少な過ぎて、入院の必要な感染者が自宅待機を余儀なくされる事態も生まれました。

・政府は以前から、哲学や文学の様な人文科学は実生

活に役立たないから、必要ないとして削減してきました。人文科学だけではりません。理論物理の様な直ぐに応用に結びつかない基礎科学も毛嫌いされています。こういうことが重ねられて、今回のような様々な困難な状況が生まれたと言えるでしょう。

・ところで「哲学」の語源はフィロソフィーで、ギリシャ語のフィロス+ソフォス、直訳すれば「愛+知」、知を愛するということです。ただこの知というのは単なる知識ではなく、真の知、真理のことで、真理を求めるが哲学だということです。だが、哲学することは、哲学者と呼ばれた専門家の抽象的な文献を解釈したりすることではありません。実は、庶民がなぜだろうと思ひ、頭を悩ませて考えることが生きた哲学だといえます。

・知の出発点は感覚です。感覚から出発して、感覚知が生まれます。個人の体験はこれに相当します。しかしこれはドクサ(臆見)のレベルを越えるものではありません。これを共有可能な経験として、もっと一般化して共通の知識とする必要があります。さらに、単に現実を説

明する知識から、世界をよりよいものに変える「実践知」を獲得する様に努力する必要があると思います。

・ただ黙って与えられるものを受け入れているだけでは世界はよくなりません。技術の開発で新しい商品が次々と登場し、それが気づかない間に私たちの生活を大きく変えています。インターネットやスマホを通じて、時間

の過ごし方が変わっただけではありません。人との関わり方、世界との関わり方そのものが大きく変化しました。しかし、様々な技術・装置の開発によるこの在り方を、「便利」「有効」と価値づけして受け入れることに注意しなければならぬと思います。

今後も、いろいろな問題をいっしょに考えましょう。

みなさんの感想など

○「記憶のエチカ(倫理)」(英語ではethics)を学ぶことができた。私なりに、「忘却は罪悪なり」と捉えて、私の記憶の脳細胞の中に「責任の倫理」と共に収めた。歴史的に忘れてはならないことは沢山ある。まずは、広島・長崎の原爆投下と日本の敗戦、沖縄の悲劇、福島原発事故等々。しかし、国家権力側は、これらの歴史的教訓を学ぶどころか、国民の記憶から抹殺しようとしている。国民の記憶も風化されつつあることを危惧する。パンデミックな新型コロナ禍の最中、追い打ちをかけるように集中豪雨、河川の氾濫、土砂崩れが住民を襲っている。これほどの「複合的」災禍を決して忘れるとは思いたくないが、現政府の平和憲法改悪の動きや原発推進政策をみると、「記憶のエチカ」も死語となる危険にさらされているような気がする。(MS)

○「哲学とは、素晴らしい!!」これが新型コロナウイルスと共生し、半年を暮らした感懐でした。2020年2月27日夕方、「学校休校要請」が安倍首相から突然に発せられ、日本中の学校が翌日から一斉に休校対応にアタフタしました。恐ろしい事態でした。児童・生徒・学生を預かる校長・学長はどのような思いでこの要請を受け、いかなるメッセージを発したのでしょうか？

2020年2月25日、イタリア・ミラノ、ヴォルタ高校のドメニコ・スキラーチェ校長から1200名の同校生徒へ向けて書かれた「生徒たちへの手紙」が世界中で話題になりました。校長は大学で哲学を学び、高校では文学と歴史を教える教師でした。「哲学」を基にしたスキラーチェ校長の生徒への篤い思いに深く感動しました。彼は、休校中に古典の良書を読み、考える生活をせよとアドバイスしました。数少ない日本古典の良書『方丈記』の一節「養和の飢饉」を読み返しました。食料自給率が40%以下といわれる日本の現状を嘆かずにはられません。今こそ「哲学」が必要であると痛感しています。

(今井雅巳)

○新型コロナウイルスのパンデミックとビル・ゲイツへの重大な疑惑



「哲学カフェ」7月例会に参加し、ビル・ゲイツ財団の策謀への懸念について、発言させていただきました。

「コロナのパンデミックに乗じて、ビル・ゲイツはワクチン開発による巨大利益の獲得をもくろみ、劣等民族を抹殺して地球環境を守るという考えから世界人口の削減を画策しています。さらに仲間のロックフェラー財団は、パンデミック後に全体主義的な監視社会のシナリオを描いています」。こんな発言をしたら、「初めてそんな話を聞いた」との声が聞こえました。私も、コロナ騒動が起きてからこのことを知り衝撃を受けて、真相をなんとしても究明したいと、居ても立ても居られない気持ちになっています。

このことについて、手っ取り早く知る方法があります。ロシアの公共放送で放映された13分ほどの短いドキュメンタリー動画です。この番組の中で衝撃的な事実が語られています。

○ロシア公共放送が衝撃の事実を公開!! コロナと人口削減【ビル・ゲイツ】字幕版

<https://www.youtube.com/watch?v=ZL108IPsrA4>

まずは上記の動画を是非ご視聴いただき、真相究明に手を貸していただいたり、どこかで議論をする機会を再度持てれば、嬉しいです。(岩間)

○今回のテーマは、今まさに喉元に突き付けられた問題だったが、どういわけかいつもより発言が少なかった。おそらく、コロナ問題は巨大で多岐にわたる論点を含んでいるということだろうが、そんな中でも異なった視点や切り口からの意見が出て、先ずそれをお互いに共有する機会になった。だが、それらは各自の経験や調べたことなどに引き付けて、少し専門家的にまとめられ

た主張が多く、結果的に一般教養的次元で論議を深め
あうことを難しくしている点も感じられた。

次回も似たようなテーマになるが、問題の幹の部分と枝
葉の部分を整理して、参加者の問題意識の重なり合う
部分で議論できると、一層有意義なカフェになるのでは
ないか。
(フィリピン・ウォッチャー)

○久しぶりの例会で、参加者の皆さんの意見を聞いて興味
深かったです。

あくまで、個人の正直な感想ですが、皆さんこの状況におい
て人間の傲慢さとか、こんな時こそ個人の美的感性が
重要とか達観した意見が多かったように感じました。とこ
ろが自分の脳内は、今後の収入をどうすれば維持する
ことができるかとか、どう生き残るかとか、それに類似す
る思考によって占拠されてしまっています。このように哲
学的な実践知の発動とは程遠い状態ですが、なんとか
マインドと心と体がやられないように生きていきたいと
思っています。
(たなか)

<世界一周貧乏旅 その13> 「お家で絶景」

前回はメキシコのビールについてのお話だったので、今
回はメキシコのセノーテについて紹介しようかと思いま
す。

「セノーテ」とはマヤ語で「聖なる泉」という意味で、中
米ユカタン半島の石灰岩地帯に見られる、大きな洞窟
群に地下水が溜まった天然の泉のことです。大小合わ
せて数千ヶ所も存在すると言われているセノーテは、長
い長い時間をかけて雨水が石灰岩を侵食し大規模な
鍾乳洞を作り、一部の天井の崩落、地表の陥没の結果
できあがったものです。

その泉が圧倒的に人気な理由は、信じられないほど
に透き通った水と、それに差し込む太陽光のカーテン
がこの世のものとは思えないほどに神秘的な光景である
ため、まさにここは死ぬまでに一度は観てみたい絶景
と言えるでしょう。

そしてメキシコ内に数あるセノーテ中でも、より水の透明
度が高く美しいと呼ばれる「グランセノーテ」へ僕は行っ
てみることにしました。

砂が舞い上がる前の朝一番が水の透明度が高いと
のことなので、カンクンという街を朝早く出発し午前8時
にグランセノーテへ着きました。まさに地面が陥没し水
が溜まったところ、ではあったのですが想像以上に大規
模な洞窟で、さらに水面上から見ても水は驚くほどに透
き通っているのがわかりました。

○今回のコロナ禍が日本にもたらしたのは、日本がデ
ジタル後進国であることを広く国民に認識させたことだ
と思う。

行政においては感染者数をファックスでやり取りし、電
卓で集計していたなんて驚かされました。また、教育関
係ではオンライン授業が可能な公立学校がほとんどな
く、授業が滞り夏休みを大幅に短縮せざるを得ない事
態になっている。他の先進国ではあり得ないことでした。

さらには、一般企業におけるテレワークでも、ネット環
境を自宅に取り入れて実施できる企業はほんの一握り
の大手に限られていた。現に自分の勤務先もなす術が
なく自宅待機という対応しかできない有様でした。世界
第3位のGDPを誇る国とは想像できない。

幸い、今回のコロナでこの実態が明らかにされた訳
で、これを好機と捉え、デジタルトランスフォーメーショ
ンを早急に推進し、行政民間ともに、諸外国からの遅れ
を一気に取り返す時期と考える。
(ryosa)



そしていよいよシュノーケリングセットをレンタルし、僕
は興奮気味に水の中へ潜りました。Google越しに見る
そこは、水底から反対側の岩壁まで見通せるほどに水
が透き通っており、まるで水族館の水槽をガラス越しに
眺めたように、とげとげした岩肌や降り積もった砂、泳ぎ
回る魚達も鮮明に見ることができました。水面を見上げ
ると、朝日が白い光の線となって真っ直ぐに水底へ降り
てきていて、細かったり太かったり、無数のその線はまさ
に光のカーテンと表現するにふさわしい光景なのでし
た。

ただ残念ながら、水中カメラを持っていなかった僕
は、水面からの写真しか撮れず、読者の皆様にはその
美しさを正確にお伝えすることができません。なのでぜ
ひ、ネットで「グランセノーテ 画像」で検索していただき
たい。その「この世のものとは思えないほど神秘的」な光
景を、おうちで堪能してみたいはかがでしょうか。

(カモノハシタニ)



<びっくりWORLDぎふ No.5>

「雨乞い神事」

雨、雨、雨の日々のなか、雨を欲したころの話をしよう。いま私の住んでいる地域は水に苦しんだ集落で、雨乞い神事が行われていた。昭和19年を最後とし、その後ため池がつくられ、また灌漑の用水路が整備されてきた。

さて、この年は域内数か所に井戸の試掘をしたが水はなく、田植えのみとおしがたたなくなっていた。村人は白山神社に集まり、雨乞いの神事を決め祈願することにした。さっそく多度神社に祈願する代参者を選び、代参者は電車に乗って多度神社でお参りをし、白幣をいただき帰る。それを白山神社に奉獻し拝殿に結ぶ。拝殿広場には蓑・笠をつけ、わらじをはいた村人が集まり、松明・篝火を焚いて祈願する。松明があかあかと燃えはじめると、鉦、太鼓、笛が響き雨乞いの唄と踊りがはじまる。白幣を持った人を先頭に焚火のまわりを踊りながらまわる。

だが、7日から10日くらいたっても雨の降るようすがみられなかったら、今度は銀幣をお受けし祈願する。それでも雨が降らなかったら、金幣をお受けし祈願する。白山神社の裏山に登っていっそう激しく火を焚き、太鼓・鉦に合わせて唄い踊る。昭和19年のときは、それでも雨は降らなかった。そこでかつて大干ばつを救ったという

いわれがある「白龍の掛け軸」をお借りして、神事をおこなう。村の各宗派の僧侶が経文を唱え祈願した。



(ネットより)

記録によると、この日は岐阜市長が白山神社に来られ、この窮状をみられる。市長はすぐさまに鳥羽川からの揚水を指示される。そして村人の代表者数人とともに上流の住民や関係機関との話し合いを続けられたという。その合意がえられ、鳥羽川からの揚水をとるために、モーターをとりつけ灌漑にいたった。真白のガリガリに乾ききった田に水は巡り7月末には田植えができたという。

山県市の伊自良地区は、鳥羽川の源流が伏流水として地下に潜る。深い谷に刻まれた集落の美山・北山、葛原、谷合では雨乞いが行われていた。そのときの唄や太鼓は民俗芸能として今も受け継がれている。また、雨乞い太鼓は盆の精霊送りや七夕送りの日には太鼓や証をたたきながら集落をまわっている。

(佐藤尚子)



<コロナ読書案内から>

詫間佳代著『人類と病』(中公新書)

私の連れ合いはリウマチ患者だ。この病気は免疫機能が自身の体を「攻撃」する膠原病の一つで、免疫機能を抑える薬を服用している。感染症を防ぐには有効な免疫機能だが、リウマチ患者には両刃の剣となり、感染症には敏感になる。そこにワクチンも有効な治療薬もない今回のコロナ禍だ。

本書は直接上記の悩みを解決してくれはしないが、感染症・生活習慣病を問わず、人類と病について多くを学べた。まず多くの感染症は、元は限られた地域の風土病だったこと。それが人間の活動範囲の拡がりに応じて、感染の範囲も広がったこと。そして広がった先で、免疫を持たない多くの人々の命を奪い、時には社会(歴史)を変えてしまうまでに至ったこと(「新」大陸のインカ・アステカ両帝国が滅んだことやルネサンス・宗教改革も、感染症の広がり関係があったらしい)。

近現代社会では以前に比べて、人や物の往来(中に

は戦争も)が圧倒的に増え、「スペイン風邪」のように、流行がすぐ世界規模になってきたこと。そして感染症対策(本書の後半で扱われる生活習慣病も同じらしい)は、各国の体制や国内事情に加えて、東西冷戦など各国間の政治的・経済的な関係に左右されてきた。この辺りの事情は、筆者が国際政治の専門家であり説得力のある記述だったし、メディアが伝えるニュースを見てもよくわかる。にもかかわらず戦前も今も、各国の研究者や組織などが、国境を超えた多くの努力を傾け、天然痘撲滅に至るなど成果をあげてきた。

ではコロナ禍の今、どうするか? 筆者はあとがきで、「結局、国際協力無くして人類は感染症に対処することはできない」と述べている。全く同感だ。さらに「病」を防ぐ国際協力が、国際平和にもつながりうることも述べている。これにも全く同感だ。期待したい。

(井川敏郎)

2020年後半 哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00～21:00です。

第146回例会 8月13日(木)	「 コロナ危機と気候危機をつなげて考える 」 会場は、岐阜市北部コミュニティセンターです。 *コロナ危機で、痛めつけられ、傷つけられた自然が少し「回復」した。 *「人災」の気候危機による自然破壊がコロナ危機を生み出したのではないか。
第147回例会 9月10日(木)	「 大学入試など、日本の教育問題を考え直す 」 *来年度実施予定の「大学入試改革」は、文科省の不手際、批判続出で破算に。 *さらにこの間、教育のありかたが根本的に問い直されざるをえなくなった。。
第148回例会 10月8日(木)	「 今後の日本の労働のあり方を考える 」 *コロナ禍対策で浮上したのは「テレワーク」という「新しい様式」だけでない。 *苦境に陥れられた非正規労働者、フリーランサー等の抜本的改革が必要である。
第149回例会 11月12日(木)	「 世界の行く末を考えるー米大統領選の結果をみて 」 *11月3日にアメリカの大統領選挙が行われ、トランプ再選なるかが焦点。 *この結果は、世界の政治・経済に重要な影響を与える。さてどうなるのか。
第150回例会 12月10日(木)	7月に開催できなかった12周年記念行事を行う方向で準備する。 ..「コロナ危機後の世界を考える！」というようなテーマで

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

わ
い
わ
い
が
や
が
や
アラカルト

★私はもう10年近く、田舎暮らしを楽しんでいるが、村社会の「変わらない」前例主義にはいささか困惑している。

★しかし、今回のパンデミック新型コロナ禍は、ローカルな村社会にもきつと何らかの「変化」をもたらすものと期待している。コロナ頼みでは情けない話だが、それというのも、国内の甚大なコロナ禍の犠牲者をみれば、何らかの社会的・政治的「変化」が起こらないとは到底思えないからである。

★グローバルな視点からすれば、コロナ禍の犠牲者数はアメリカがNo.1だ。次に、ブラジル、インド、ロシア、ペルー、チリ、メキシコ、英国、イラン、スペインと続く。この中で、アメリカの社会的脆弱性は、人種差別、貧困格差、医療保険制度の欠陥などに因ると指摘されている。

★今、コロナ対策において、世界的に最も注目を集めているのは、ドイツのメルケル首相、ニュージーランドのアーダーン首相、台湾の蔡英文総統の3女性リーダー。ほかにコスタリカのアルバラード大統領である。

★これらの政治指導者たちに共通して言えることは、自分の言葉で国民に語りかけ、国民の経済的救済措置を機敏にとり、国民から全幅の信頼を勝ち得ているということである。これに引き換え、日本の安倍首相は世界でも最低であることは、言わずもがなである。

★しかし、情けないことに、この国民にして、このリーダーあり、としか言いようがない。コロナ禍の教訓を学び、私たち国民も「変わらなくてはならない！」。

(島田幹夫)

